

私の思い出の症例・研究裏話

てんかん学分野 鈴木 菜摘



障害科学専攻てんかん学分野の鈴木菜摘です。私は、今年の3月に博士前期課程を修了しました。修士の2年という期間は振り返ってみるととても短く、しかしとても充実した期間であったと感じます。中でも、アメリカてんかん学会に参加させていただいたことは、私の大学院生活において大きく記憶に残るものでした。

アメリカてんかん学会 (American Epilepsy Society; AES) とは、年に一度アメリカで開催されるてんかんの国際学会で、全世界からてんかんの研究者が集まり、数多くの研究成果が報告されています。2014年は、シアトルで開催されました。

アメリカ・シアトルは仙台空港から成田空港を経由して約12時間の飛行時間を経て到着します。気候は1年を通して雨が多く、学会期間中の12月は平均気温4℃と、日本とあまりかわらない気候の中で過ごすことができました。高層ビルが並ぶものの都会という表現にすっぽり当てはまるかといえばそうではなく、小さくておしゃれなお店やマーケットが並ぶ、レトロでかわいい街並みが印象的でした。

さて、私たちは、学会初日、会場に足を運ぶ前に、ある病院を訪問しました。ワシントン大学シアトル校のてんかんモニタリングユニット (Epilepsy

Monitoring Unit; EMU) を見学させてもらうためです。院内のEMUの概要を説明していただいた後、フロアを見学させていただきました。EMUの規模の大きさ、スタッフの多さには圧倒されました。しかし、EMUの軸となるモニタリングは、東北大学病院てんかん科と大きく異なる点はないのかな、というのが正直な感想です。この軸に、どのような肉付けをしていくのかが大切であるかを感じました。病院を後にし、AES会場へと向かいました。私がAESで一番印象に残ったのは、ポスターセッションの規模の大きさです。100枚を超えるポスターが日々代わる代わる貼られ、そのポスターの前で研究者たちがディスカッションする姿に、圧倒されるばかりでした。それでも、自分と同じ分野の研究をしている方から話を聞いたり、ポスターを見たりして、研究のヒントを得られたことは大きな収穫でした。

学会中は、これからの自分への課題をいくつも目の前にどーんと置かれるような、そんな毎日の連続で、気分が落ち込んでしまうこともありましたが、この経験があったからこそ、無事、3月の卒業を迎えられたのだと思っています。AESへの参加の機会を与えてくださったてんかん学分野の皆様には感謝申し上げます。

私は、4月から新たな環境の中で生活しています。大学院時代にはこうした機会を何度も与えていただきました。そこで学んだことや感じたことすべてを糧に、これからも見聞を広げることに食欲に、生活していきたいと思っています。